

文献にみる首里方言の音韻変化：石崎博志
(2015) を読んで

かりまた, しげひさ

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

41

(開始ページ / Start Page)

225

(終了ページ / End Page)

238

(発行年 / Year)

2017-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014501>

文献にみる首里方言の音韻変化 —石崎博志（2015）を読んで—

かりまたしげひさ

1. はじめに

昨年2015年、中国語音韻史を専門分野とする石崎博志氏が琉球語を記した漢語資料、ハングル資料、外国語資料に関する研究の成果を『琉球語史研究』好文出版（以下、石崎2015）として公刊した。

石崎2015は、『海東諸国紀』（1501）から「アグノエル語彙」（1818）までのハングル資料、漢語資料、ヨーロッパ人による外国語資料について、筆記者の特定、筆記者の来歴（母語方言や社会的性格等）を検討し、かつ、資料自体の信頼性（先行文献資料の引き写しの有無等）も検討したうえで研究を行っている。そして『使琉球録』（1535）、『琉球館訳語』、『中山傳信録』（1721）、『琉球入學見聞録』（1764）、『琉球訳』（1800）、「アグノエル語彙」（1930）を主要な分析対象にしている。

『おもろさうし』（以下、オモロと略記）は、全体の量、記載されている単語数、文法形式の豊かさの点で琉球語史研究の重要な資料である。しかし、音節文字の仮名文字が使用されているため、ハ行子音がpであったか、φであったか、hであったかを特定することは困難である。同じく「チ」「ツ」の子音が破裂音であったか破擦音であったかを特定したり、エ段の仮名文字の母音がeであったかiであったかを特定したりすることも困難である。したがって、オモロなどの和文資料を用いた音韻史研究には大きな限界があった。ハングルや音訳漢字は、琉球語の母音や子音の音価を推定するうえで有効である。

石崎2015は、第1章で陳侃・高澄（1535）『使琉球録』（「夷語」「夷字」）、「琉球館訳語」、「日本館訳語」の三者の提示語、音訳漢字、および誤用等を検討し、三者の継承関係について論じている¹。この作業は『使琉球録』（「夷語」「夷字」）、「琉球館訳語」を使って当時の琉球語を研究するうえで重要である。

石崎2015は、第2章で『中山傳信録』（1721）の中で引き写しの可能性のある語を排除し、信頼できる初出項目と訂正項目に限定して分析している。中国語方言音韻研究の成果に基づいて、入声韻、陽声韻等を多面的かつ帰納的に検証し、徐葆光の母方言の蘇州呉方言を音訳漢字にした可能性が最も高いことを指摘している。音訳漢字の発音と現代首里方言の

¹ 服部四郎は1978年から1979年まで『月刊言語』（大修館）誌上で22回に亘って「日本祖語について」を連載した。その中で『海東諸国紀』『中山傳信録』『使琉球録』などの分析も行って、服部1978(7)(8)も三者の関係について論じている。服部の連載全体を指すときは服部1978、各号の記述を指すときは、服部1978(1)、服部1978(2)などのように示す。

発音などを比較して、ハ行子音の摩擦音化が『中山傳信録』の書かれた18世紀に発生したこと、「キ」の破擦音化がまだ起きていないことを論証している。6章と7章では複数の文献を対象にした通時的な検討を行っている。

石崎2015は、第3章で『琉球入學見聞録』（1764）の音訳漢字と当時の「琉球語」を比較考察しながら、音訳漢字の基礎方言が揚子江以南の南方官話の可能性を指摘し、合わせて、当時の琉球語の音韻状況を考察している。特に、ハ行ア段音（「ハ」）の音価、カ行イ段音の破擦音化と合流の有無等を論証している。6章と7章では複数の文献を対象にした通時的な検討を行っている。

石崎2015は、『琉球訳』（1800）の音訳漢字および語彙や語法を検討し、『琉球訳』の編纂に首里四公子が深く関わっていることを論証して次のようにまとめ、『琉球訳』の琉球語の「音訳漢字の音価を推定」して研究を進める素地を作った。

李鼎元の記述を考慮すると、漢語を母語とする者によって編纂されたのではなく、首里四公子ら漢語に熟知する琉球語話者によって編纂された可能性が高い。そして、音訳漢字には入声字が多いが、閩語や呉語の特徴が観られないこと、日母字が有声破擦音に近い発音で読まれること、また何より琉球王国内の琉球人によって編纂された可能性から、音訳漢字の基礎音系は南方官話系の音系に近いと思われる。

石崎2015は、第5章で1930年に沖縄地方の民俗、言語、歴史に関する調査メモを残したフランス人のシャルル・アグノエルの「アグノエル語彙」を分析している。アグノエルは糸満、那覇、名護、今帰仁等の沖縄島、久高、伊江島の離島の20地点の方言の記録を残している。「アグノエル語彙」を日本語で紹介したのは石崎2015、石崎2012、石崎・ウェイ2012の論考が初めてである。

石崎2015は、新たな知見を提出していて、興味深い考察も多い。いっぽうで、現代琉球諸語の記述研究に携わる者として気なる記述もある。漢語資料、ハンゲル資料に基づく言語史研究の知識不足、原本を分析できない非力からくる読み誤りや勇み足が無いが躊躇われるが、今後の琉球語音韻史研究の一助となることを願って卑見を述べることにする。

2. カ行ア段音の摩擦音化をめぐって

石崎2015は、第6章で『海東諸国紀』（1501）～伊波普猷（1932）『琉球語大辞典（草稿）』および国立国語研究所（1963）『沖縄語辞典』までの15点（「おもろさうし」「混効験集」を含む）を検討し、首里方言のハ行音の変遷、すなわち、 $p > \phi > h$ の変化の時期を探っている。『海東諸国紀』から少なくとも陳侃（1535）『使琉球録』まで、あるいは、肅崇業（1579）『使琉球録』までは、ハ行子音が p であり、『中山傳信録』（1721）から ϕ に変化しはじめて

いること、 $p > \phi \cdot h$ の変化が17世紀から18世紀前半までの時期に起きた可能性を論証している²。

石崎2015は、ハ行音の摩擦音化を検討する中で首里方言の「カ」の子音kがhに変化していたことを論じる。過去のある時期の首里方言において $k > h$ の変化があったことは、琉球語研究者がまったく想定していなかったことである。

石崎2015は、かつて首里方言でkがhに変化したと主張する根拠として、首里方言以外の方言の例を次のように挙げている。

現代琉球語をみた場合、これを裏付ける根拠がある。現代首里や那覇の方言には、この現象はほぼみられないが、本書第5章の示す沖縄北部方言、方言研（1980）が示す久高島方言と上野善道（1992）が示す喜界島方言、菊千代・高橋俊三（2005）の示す与論方言等において、カ音を [ha] で発音する地域がある。『見聞録』編纂当時の官生には離島出身者はおらず、首里や那覇の出身者が占める。よって、『見聞録』の表音は、当時の首里や那覇でカ行ア段音「カ」を喉音 [ha] で発音していた可能性を示している。（p. 70）

石崎2015のいうように、名護市以北の沖縄島北部方言、久高方言、与論方言、喜界島方言でkはhに変化している。この変化は規則的なもので、後続母音がa、oのkがhに変化する。方言によっては後続母音がeのkもhに変化する。同じ条件で摩擦音化しない単語は、借用語か特定の音環境の単語に限られている。しかし、これらの方言は首里方言とは大きく異なる方言圏に属し、音韻体系も異なる。これらの方言を根拠にして首里方言で $k > h$ の変化があったことを主張することはできない。管見の限り後続母音がaのときだけ摩擦音化する下位方言もみられない。

石崎2015は、オモロの例を首里方言の $k > h$ の変化の根拠にする。

同様の現象は『おもろさうし』にもあり、和語の「カ」が「ハ」で記されている例が観られる。（はねのしま（金の島）<9-3> = 仲吉本・田島本、ぬれはみや（濡れ髪の人）<13-209>など）この「は」は「か」の、間違いとされることもあるが、上述の現代方言の状況や漢語資料の状況から、かつて首里方言に「カ」が「ハ」になる現象が存在したことを裏付けるものである。（p. 71）

kがhで現れるとみられるのは、「はねのしま」、「ぬれはみや」、「はゝら」、「まはない」などである。オモロの他の例では「カ」と「ハ」には混用例がない。高橋1991は、これら

² 服部1978(13)(14)も同趣旨の内容を詳細に論じている。その分析方法には学ぶことが多い。

が例外的で、誤記であろうとしている。

石崎2015は、『漂海始末』の「甘藷(かんしょ)」のハングル転写hanusju (p. 180)、hansjo (p. 181)があることから、「甘藷」が/hansjo/と喉音であらわされている(p. 181)と述べる。『漂海始末』のhanusju、hansjoに対応する首里方言の単語は、/haNsu/である。この/haNsu/に対応する奄美方言の単語は、/haNsi/、あるいは、/hanusi/ (いずれも長田須磨他1977)であり、喜界島志戸桶方言の単語は ϕ aNsu:であり、喜界島佐手久方言の単語はpaNsu: (いずれも法政大学沖縄文化研究所1978)である。志戸桶方言と佐手久方言の語形から語頭音節はkaではなくpaであったことが分かる。したがって、『漂海始末』のhanusju、hansjo、首里方言の/haNsu/は、kがhに変化した語形とは言えない。

石崎2015は、「現代首里方言にも「カ」が喉音になっていると思しき例」(p. 191)として「hakijuN、(首に) [hakijuN]」を挙げているが、仲宗根1983の対応語は、p'ak'i:ruNである。首里方言のhakijuNも今帰仁方言のp'ak'i:ruNも「身につける、帯びる」などの意味をもち、「^は佩ける、^は帯ける、^は穿ける」などの漢字で表記されることのある弱変化(他動詞下二段)の動詞である。したがって、kが摩擦音化してhになった語形ではなく、pが摩擦音化してhになった語形である。

さらに、ベッテルハイムの資料にあるassi hayung (汗をかく)のhayungに対応する現代首里方言として/kacuN/をあげ、「カ」が喉音のhで記される例も観られる」と、kがhに変化した例として述べる。しかし、hayungに対応する現代首里方言の単語は、「①走る、②流れる、流れ出る」の意味を表わすhajuNである。この単語に対応する今帰仁方言は、p'aNであり、首里方言のhajuNの語頭のhは、 $p > \phi > h$ の変化の結果である。

石崎2015は、現代首里方言でかつて首里方言で $k > h$ の変化の後にhがkに戻ったかのよう^に述べる。

カ行ア段音が喉音[ha]になる現象は『おもろさうし』にみるよう^にかつての首里方言に存在していたものであり、18世紀まで比較的保たれてきたものと考えられるが、現代首里方言ではこの現象がなくなっている。これも現代の琉球語が[p]とともに失った現象の一つといえよう。(p. 72)

$k > h > k$ と $p > \phi > h$ は、同列には並べられない。また、声門摩擦音hの軟口蓋破裂音kへの変化は、他の琉球諸語でも観察されておらず、 $h > k$ を首里方言に想定することも難しい。仮に石崎2015の「18世紀まで比較的保たれてきたものと考えられるが、現代首里方言ではこの現象がなくなっている」を認めて、p. 192の表の右端の列で時間の経過を見ると、 $k > h > k > h > k$ のように、文献ごとに変化していくことになる。一度hに統合した音素

が一時期kに戻り、再びhに変化し、再再度kに戻るという変化を繰り返すことは、きわめて不自然である。石崎2015も「前の時代にすでに失われている区別がのちの時代に新たに分けられる状況は、言語の歴史一般からすると些か不自然である」(p. 218)と述べている。

いっぽうで、他の文献とは異なり『見聞録』(1764)には「カ」を「喀(カ)」で表記した語例だけでなく、「哈(ハ)」で表記した語例も少なくない。明らかに語頭に「カ」を持つ単語が「哈」で表記されている。

『見聞録』でカ行ア段音に喉音“哈”を多用する理由は、一部のカ行ア段音が軟口蓋音[k]ではなく[h]であったことを示す。(p. 70)

これまでの琉球語研究者の想定に反するこの事実をどう説明したらよいだろう。『見聞録』には語中の「ガ」を音訳漢字「哈」で表記したと思しき次の例が見られる。「哈」が軟口蓋破裂音を表すために使用された可能性を示唆すると考えるのは早計だろうか。

「鏡子(かがみ) 哈哈密」(p. 70)、「東(ひがし) 熏哈失」(p. 177)

あるいは、字体の似た「喀」を「哈」と書き写した可能性を考えるのは素人の早合点だろうか。いずれにせよ、「カ行ア段音が軟口蓋音[k]ではなく[h]であった」という結論を出すにはもう少し検討が必要ではないだろうか³。

3. カ行イ段音と甲乙の区別

石崎2015は、第7章でカ行イ段音(キの子音k = 軟口蓋破裂音)の破擦音化について、「キ」と「チ」の合流を詳細に検討し、破擦音化が18世紀後半には起きていたことを明らかにした。

「語音翻訳」や「陳侃」ではカ行イ段音の口蓋化・破擦音化はまだ発生していない。その後『おもろさうし』でカ行拗音の一部が口蓋化・破擦音化する兆候がみられるものの、基本的に18世紀の『伝信録』や『見聞録』でも書き分けられていた。そして「キ」と「チ」の合流は文献上『琉球訳』(1800)で確認される。よって両音の合流は『見聞録』(1764)と『琉球訳』(1800)の間、つまり18世紀後半に発生することになる。(p. 214)

なお、服部1978(6)、同1978(8)、同(9)は「キ」と「ケ」の区別について、服部1978(10)~(12)

³ p. 202のカ行に関する表中の現代首里方言の語例の/h/は、全て/k/の誤植であろう。なお、論述上重要な意味をもつ表中、その他の箇所でも現代首里方言部分に誤植が散見される。

は「チ」「ツ」を含めた子音の破擦音化および母音の変化を詳細に考察している。

ところで、石崎2015は、上記の結論を述べた後にこれまでの琉球語研究者と大きく異なる意見を述べる。その見解は、カ行イ段音の破擦音化を検討したうえで帰納した結果であるが、これまでの琉球語研究者の見解に大きな変更を迫るものである。

最後に、現代首里方言などで、カ行イ段音で軟口蓋を保持している「木」などの発音が、上代特殊仮名遣いの反映であるかという問題に卑見を述べたい。文献では、少なくとも「語音翻訳」は同じ子音のハングル、「陳侃」、『伝信録』や『見聞録』では同じ音訳漢字が使われるため、甲類と乙類の違いはない。そしてこの違いが再び現れるのは19世紀になってからである。よって文献から帰納される結果では、現代首里方言のカ行イ段音に関する二つの発音の区別、つまり「き」と「ち」の区別の由来を本土方言の上代に求めるのには躊躇せざるをえない。(p. 214)

服部1978も『語音翻訳』『音韻字海』『華夷訳語』『使琉球録』『中山傳信録』などを検討している。そして首里方言における甲乙の「キ」の変化過程を次のように想定する。

琉球首里方言					
奈良時代中央方言		日本祖語	A時代	B時代	C時代 (現代を含む)
[ki] (甲類キ)	←	*ki	→ *ki	→ [*kji]	→ [tʃi]/ci/
[kʰi] (乙類キ)	←	*kui	→ *ki	→ [*kji]	→ [tʃi]/ci/
[kʰi] (乙類キ)	←	*kəi	→ *ke	→ [*kʰi]	[kji]/ki/
[kʰe] (乙類ケ)	←	*kai	→ *ke	→ [*kʰi]	[kji]/ki/

服部1978は、琉球祖語が日琉祖語から分岐したのち、狭母音化が始まるまでの時期（14世紀あたり）をA時代とし、15世紀以降、首里方言の狭母音化が完成するまでの時期をB時代としている。A時代*kiになる乙類キは、月（ツキ）のキで、月夜（ツクヨ）のクと母音交替する。*keになる乙類キは木（キ）のキで、木立（コダチ）のコと母音交替する。ここで問題になる乙類キは後者である。

B時代の「語音翻訳」では「雨」の「メ」、「鍋」の「ベ」、「酒」の「ケ」、「姉」の「ネ」の母音がuiという二重母音の字母「」を含むハングルで記されている。イ段の音節は字母「」を含むハングルで記され、エ段の母音とイ段の母音の違いを聞き分けようとしていたことがわかる。服部1978(8)は、次のように述べている。

右の研究によって、「語音翻訳」当時の琉球語には[kji]と[*kʰi]、[gji]と[*gʰi]の対立が

あったことが明らかとなった。(p. 96)

さらに、服部1978(9)は、『中山傳信録』『音韻字海』『華夷訳語』を検討し、甲類キと乙類キの書き分けについて次のように述べる。

右を概観して直ちに明らかになることは、三書ともに(甲)グループと(乙)グループとを表記し分けようとしている気配が全くない、という点である。しかしこれは、琉球語の発音に両グループの区別が無かったためではなく、これらの漢字表記の基礎となったシナ語の音韻体系に原因があったのだということが以下の論述で明らかになるであろう。(p. 114)

服部1978は、B時代の*kiの母音を「緩んだ母音i」としている。そのB時代の母音iに近似的な母音は奄美方言の中舌狭母音iであり、前舌狭母音iと対立している。

ʔamī (雨), nabī (鍋), kī (毛), ʔudī (腕), nī (根), ʔasī (汗), kī (木),
k'umi (組), k'ubi (首), k'imo (肝), ts'ikī (月) 龍郷町瀬留方言

奄美方言の中舌狭母音iは、本土方言のエ段の母音eに対応し、奄美方言の前舌狭母音iは本土方言のイ段の母音iに対応する。奄美方言のkī (木)は、奈良時代中央方言の乙類k'iおよびA時代の*keに対応する。服部1978の表を次のように書き換えることができる。

奈良時代中央方言		日本祖語		A時代		奄美方言		首里方言
[ki] (甲類キ)	←	*ki	→	*ki	→	[kj'i]	→	[tʃi]/ci/
[k'i] (乙類キ)	←	*kui	→	*ki	→	[kj'i]	→	[tʃi]/ci/
[k'i] (乙類キ)	←	*kəi	→	*ke	→	[k'i]	→	[ki]/ki/
[k'e] (乙類ケ)	←	*kai	→	*ke	→	[k'i]	→	[ki]/ki/

服部1978からも分かるように、甲類キと乙類キの区別は母音の違いに求められる。A時代もB時代も母音の区別は保持されているし、子音も口蓋音化の有無の違いがある。奄美方言は母音でも子音でも甲乙の違いが保持されている。首里方言では母音は統合したが、甲類キが破擦音化することで甲乙の区別が保持されている。

いっぽう、石崎2015は、キの破擦音化の時期を特定することが主眼であった7章で子音にのみ注目して検討している。口蓋音化の有無を排除して子音にだけ目を向けると、B時代には甲乙の区別が隠れてしまうが、C時代(石崎2015では19世紀)になると、口蓋音化

した甲類キの子音が破擦音化して甲乙の区別が再び顕在化したようにみえる。先にあげた石崎2015. p. 214の結論はそのようにして出されたものと推察される。

なお、石崎2015は、カ行イ段音「キ」の破擦音化の時期を論じる中で、『琉球訳』の「訳訓」を検討し、次のようにカ行エ段音が破擦音化したと述べている。

カ行イ段音やエ段音にも中古の澄音 * /d/ (後に [ts] に変化) に由来する“直”が使われていることから、これらは破擦音化していたとみられる。(p. 206)

カ行イ段音・エ段音に使われる音訳漢字と、タ行イ段音で使われる音訳漢字は重複している。ここからカ行イ段音・エ段音は破擦音化してタ行イ段音に合流していることが分かる。(p. 206)

『琉球訳』を検討した第4章でもケが破擦音化したことを述べる。?ici (池)、hwizi (髭)等は現代首里方言でケ、ゲの子音が破擦音化する語例だが、これは先行のiの影響で破擦音化したものである。しかし、そういう音環境にない現代首里方言の「ケ」は、ki: (毛)、saki (酒)等の語が示すように破擦音化しておらず、破裂音kのままである。もし、石崎2015の主張を認めると、「ケ」が破擦音化して、「キ」と「チ」に合流した後に「ケ」に遡る音節だけが破裂音化して元の破裂音kに戻って現在に到るという不自然な変化をしたことになる。

石崎2015の91頁と206頁の語例はいずれも「及木里」烟で、対応する首里方言の例はcimuri (煙)⁴であり、語頭音節のケはciである。しかし、服部1978(5)(6)が詳しく論じたように日本祖語から分岐後のB時代に九州方言から借用された単語は「ケ」が破擦音化している。また、『中山傳信録』(1721)でri > iの変化が起きていて、現代首里方言でもiの前のrが脱落している。『琉球訳』の「及木里」にrがあるとすれば、『沖縄語辞典』の文語という記述と合わせて考えると、服部1978のいうB時代以降、ri > iの変化後の借用語である可能性が高い。

石崎2015は、特定の音環境のケや借用語のケが破擦音化したと言っているのではなく、カ行エ段音がタ行イ段音と合流したと主張しているのである。現代琉球語の比較研究の立場からただちに容認するのは難しい。

4. rとnの音価をめぐって

石崎2015は、第8章で「語音翻訳」を分析し「[l]と[n]を明瞭に区別できるハンゲル資料」

⁴ 現代首里方言の口語の「煙」はkibusiである。この語形は沖縄方言に広くみられる。

にあって、現在の首里方言で[l]が現れる単語のrに[n]が現れる例と、逆に、[n]が現れる単語のnに[l]が現れる例があることをpp. 220-221の表にまとめている。そして、それを根拠に、首里方言の/r/が不安定な音声であったと主張する。

「語音翻訳」のように[l]と[n]を明瞭に区別できるハングル資料でも琉球語とハンゲルの間に正しく対応していない状況があり、琉球語が歴史的にも/r/[l]の脱落や/r/[l]の[d]への転訛など、[l]にまつわる音声変化が多い。(中略)

琉球語の[l]が通史的に自由変異の余地のない安定的な音声だったという前提に疑義を抱く。少なくともこれを根拠に基礎方言を特定し、琉球語全体の再構音を考えることの危うさは指摘しておきたい。(p. 82)

石崎2015は、p. 57の表で「蒜：非徒」をあげ、「蘇州を基礎方言とするならこれも /r/([r])が[d]に変化した」(p. 60等)と、 $r > d$ の変化が起きたことを主張する例として挙げる。 $r > d$ の変化は、那覇方言、糸満方言等で漢語の語頭に現れるrがdに変化する場合にはほぼ限定される。あるいは、 $abura > aNda$ (油、p. 64表中)、 $komura > kuNda$ (脹脛)等の語中の特定の音環境の場合に限定される。そういう音環境にない「蒜」firuがfiduに変化することは通常は見られない。

以下のように特定の音環境のrが脱落したりdに変化したりする。さまざまな音環境にあるrが均質的に安定していたと琉球語研究者は考えているわけではない。

- ① $ri > i$ 、 $rj > j$ の変化(口蓋音化して音統合したり、jに変化)することがある。
- ② しかし-iriの音環境のrは脱落しない。
- ③ $makura > makkwa$ (枕)のように-kuraの音環境のrが音消失・脱落する。
- ④ $abura > aNda$ (油)などのような-bura、-bira、-muraの音環境でbu、muが撥音化したのち、進行同化によってrがdに変化する。
- ⑤ 特定の下位方言で語中のdがrに変化するが、その逆は起きない。
- ⑥ 特定の下位方言で語頭のrがdに変化するが、その逆は起きない。

本書に指摘された『中山傳信録』の例が「蒜：非徒」の1例であり、rを含む他の単語が書き分けられているのなら、他の可能性について考えるか、少なくとも「語料が少なく」、「本資料だけでは判断が困難である」とするのがよかったのではなかったか。『琉球訳』の例は、地名に見られ、それについては石崎2015も「漢人が筆記した可能性がある」(p. 105)としている。

特定の音環境のrが脱落したり、特定の音環境のrがdに変化したりする現象は、ハンゲ

ル資料に見られる $l > n$ 、 $n > l$ の混同とは、分けて検討しなければならない。

服部四郎1979(7)は、「語音翻訳」における r と n の表記について詳しく検討し、 r と n の混同例について次のように論じている。

この文献（「語音翻訳」⁵）は、以下に述べるように、その他の点では、字母の字体の類似に起因すると考えられる少数の明らかな誤りを除き、琉球音の表記が概して非常に正確であると認められるだけに一そう、右掲のような32パーセントにもものぼる n と r の混同例はハングル字体の類似によって生じたものとしては、説明することはできない。（p. 99）

ハングル製作の基礎となった十五世紀後半以降の朝鮮語にも $/n/$ と $/r/$ の音素があったから、「語音翻訳」の著者成希顔は琉球語の n と r を楽に聞き分け得たに違いない。尤も、当時の朝鮮語では自立語語頭には、 n は立ち得たけれども r は立ち得なかった。（中略）従って、知識人を除いては、“正式には” r （ \equiv ）で書かれる漢字音は実際には n で読まれたため、漢字音を表すハングルを取扱いながらもこの点に関する原理を十分に理解しない半知識人の中にはハングルの r と n を混同する傾向があったであろう。成希顔自身にはそんな癖があったとは考えられないから、右述の誤記を説明するためには、筆耕あるいは印刷職人にそういう癖があったと考えるよりほか仕方がないのではなかろうか。（p. 100）

石崎2015も、「この誤りの原因が朝鮮語話者の聞き間違いなのか、当時の琉球語の反映なのかは、本資料だけでは判断が困難である」（p. 221）と述べている。「通史的に自由変異の余地のない安定的な音声だったという前提」に対する疑義と「琉球語全体の再構音を考えることの危うさ」の主張は、再検討が必要なのではないだろうか。

5. 狭母音化をめぐって

石崎2015は、第9章で琉球語の「(1)エ段音やオ段音の狭母音化がいつ発生し、どのように変遷したのか、(2)長母音が歴史的資料でどのように表記されているのかについて考察」（p. 246）している。そして、現代首里方言の母音体系について次のようにまとめている。

現代首里方言の基本的な母音体系は『見聞録』から『琉球訳』、クリフォード語彙の間で概ね確立したといえる。（中略）つまり首里方言は18世紀後半から20世紀半ばまで200年間ほぼ同じ状況であったことがわかる。（pp. 280-281）

⁵ () は狩俣の補い。

さらに、狭母音化の発生と進行経過について以下のようにまとめる。

短母音のオ段音、エ段音の狭母音化の兆候は「語音翻訳」(1501)の段階で観られるが、まだ一定の区別があったことが分かる。そしてこの資料でより狭母音化しているのはオ段音よりエ段音である。その後、オ段音がエ段音より狭母音化が進み17世紀前半にはかなり進行していたことが『おもろさうし』や『伝信録』で確認され、エ段音が追隨する。(p. 281)

石崎2015は、母音体系の全体の変化を三母音化といい、「どの子音と結合するかに関わらず音韻的に母音がア段、イ段、ウ段の体系になった段階を三母音化の完成とみなす。具体的には現代首里方言の体系になった状態をさす」(p. 246)。狭母音化は、エ段音のイ段音への合流、オ段音のウ段音への合流をいう。前舌半狭母音eの前舌狭母音iへの変化、および、奥舌半狭母音oの奥舌狭母音uへの音韻変化であると言い換えられる。

先述のように服部1978は、『語音翻訳』のハングルの音価を推定し、当時の琉球語(首里方言)のエ段の母音を緩んだ母音iと推定している。高橋1991は、オモロのエ段の母音の音価をiと推定している。仮名文字から母音の音価は推定できないのだが、服部1978や比較言語学の成果に基づいたものである。

石崎2015の「三母音化」に倣うなら、狭母音化にも完成がある。完成があるのなら途中にいくつかの段階もある。これまでの琉球語研究者は、eの狭母音化について $e > i > i$ の変化過程、および、 $e > i$, $i > i$ の二段階を想定してきた。石崎2015の第6章と第8章からも分かるように結合する子音の韻質の違いによる狭母音化の遅速がある。オモロのオ段音にみるように、単語による狭母音化の遅速もある。奄美竜郷瀬留方言でもk'imo(肝)、hato(鳩)、moho(婿)、jowë(祝い)、borë(群れ)など一部の語にoが保存されている。

対象となる文献の制約、あるいは、中国語と琉球語の違いによる制約があるのか、石崎2015は狭母音化の段階的な違いに言及していないが、音韻変化が一気に進むのではないとするなら、 $e > i > i$ のiのような中間段階が $o > u$ の途中になかったのか、ハングルや音訳漢字を手がかりに探ることはできないだろうか。今後の研究に期待したい。

なお、母音の変遷について述べる中で、石崎2015は、オモロのオ段とウ段の母音について、「当時のオ段音とウ段音は書き分けが困難なほどに合流していたことがうかがえる(p. 256)」と述べる。

オモロは、オ段の仮名が期待される場所はオ段の仮名で書かれ、ウ段の仮名が期待される場所はウ段の仮名で書かれる例が多い。高橋1991は、その両方で書かれる例を精査して、表(pp. 117-118)にまとめ、続けて次のように述べる。

oからuへの変化の過渡期とみなしたほうが穏当なように思われる。(中略) 本土のウ段音に対応する語をオ段音で書いているものを、すべて規範意識による類推仮名遣いとみなして良いかどうかは今後の検討を要する。特に「こむで(組手)」、「まこ(幕)」、「のすで(盗んで)」、「もこ(婿)」、「よべ(昨夜)」、「よき(雪)」、「めまよ(目眉)」などオ段の仮名の例しかないものはそうである。ちなみに、「もこ」、「まよ」の形は『万葉集』にもあり、「よべ」の形は『鹿児島方言辞典』にもある⁶。また、オ段の仮名が動詞連体形に多いのは、上代東北方言と類似する⁷。(p. 118)

万葉集に現れる「もこ」「よべ」「よき」「まよ」、オ段の連体形語尾、および九州方言や奄美方言でoの現れる「ほれ(群れ)」「よわい(祝い)」「もこ(婿)」⁸等を除くと、pp. 117-118の表のBグループ(ウ段の仮名が期待されるところにオ段の仮名で表記される語例)は半数以下の20数例になる。オ段の仮名とウ段の仮名を正しく書き分けようとしており、「oからuへの変化の過渡期」であり、一部の単語のoは狭母音化していたが、オ段とウ段の統合は一部に留まっていたと考える。

石崎2015も次のように述べる。「語音翻訳」の「オ段音は殆どが[o]を示すハングルエ/o/で示されており、オ段音とウ段音は区別が保たれている」(p. 249)。同じく『使琉球録』のオ段音についても「“谷”や“禄”の音訳漢字は、オ段音とウ段音の両方に使用されるため、一部のオ段音は狭母音化してウ段音に合流している状況がみられる」(p. 249)。石崎2015の示した「語音翻訳」や『使琉球録』の状況は、同時期のオモロのオ段音が一部の単語でoのuへの変化はあったが、oのuへの統合の途中であったことを支持するのであって、「当時のオ段音とウ段音は書き分けが困難なほどに合流していた」という主張を直ちに承認することはできない。

石崎2015のいう「語音翻訳」(1501)のオ段音、エ段音の狭母音化の兆候とは何か。オ段音よりエ段音が狭母音化しているというのがどの段階のどのような狭母音化なのか。その後、エ段音より進行した17世紀前半のオ段音の狭母音化はどのような現象なのか。その後に追隨するエ段音の狭母音化は具体的にはどのような現象なのか。一部の語例に見られる変化なのか、特定の韻質の子音に限られた変化なのか。音素の完全な統合なのか。狭母音化の進行状況の詳細が知りたいところであり、漢語資料、ハングル資料を用いた音韻史研究に期待するところである。

⁶ 「よべ」は『宇津保物語』にもある。

⁷ 「よき(雪)」については『万葉集』の東歌に例がある。安溪遊地2014は、「よき(斧)」であろうとする考えを述べている。かりまた2014は、オモロの連体形語尾がオ段の仮名で書かれ、オ段とウ段の混用のないことを述べた。

⁸ 『奄美方言分類辞典』でborë(群れ)、jowë(祝い)、moho(婿)の語がみられる。

6. サ行イ段・ウ段・オ段の区別

石崎2015は、第4章の『琉球訳』の分析の中でサ行イ段音とウ段音とエ段音の弁別について次のように記している。

現代首里方言は、サ行イ段、ウ段、エ段は合流してイ段音[ci]に合流している。しかし、それ以前は、士族の言葉ではサ行イ段とエ段音は[ci]、ウ段音は[si]という音形で区別されていた。つまり音声的違いは、イ段・エ段とウ段の間にあった。しかし、上記の音訳漢字をみると、士族とは区別の内容が異なる。(中略)つまり、サ行イ段音、ウ段音、エ段音は二つの音類に分かれるが、『琉球訳』はイ段／ウ段・エ段という区別になっており、士族のイ段・エ段／ウ段という区別とは異なる。(p. 96)

石崎2015は、「ザ行イ段・ウ段・エ段は、サ行清音短母音と同様の傾向が観られる。」(p. 97)と述べ、ザ行に関しても「現代首里の士族層の発音と異なる」と述べている。

サ行イ段・ウ段・エ段の三者とザ行イ段・ウ段・エ段の三者の区別について詳細な言及が石崎2015ではそれ以上になされていない。『琉球訳』の状況は、首里士族層の方言が他の社会層方言あるいは那覇方言等とは異なる体系の方言であったことを示している。石崎2015は、『琉球訳』の編纂に首里四公子が深く関わっていることを指摘したが、『琉球訳』の「琉球語」の方言提供者が首里士族層以外の人であった可能性もあることになる。

奄美方言、徳之島方言は『琉球訳』のサ行とザ行の三者の区別と同じ「イ段／ウ段・エ段」の区別をする。『琉球訳』の区別が奄美方言、徳之島方言と同様の区別の仕方をしてきた可能性がある。多くの沖縄諸方言はサ行イ段・ウ段・エ段の三者がciに統合していて、先行する時代にどのような区別がなされていたか不明であった。そんな中で首里士族層方言が数少ない手がかりであり、沖縄諸方言と奄美諸方言とは異なる有り方をしていただろうと考えられていた。しかし、『琉球訳』のサ行とザ行の三者の区別の仕方は、その考えに再考を迫るものである。

ʔuci (牛)、ʔici (石)、ʔuci (白)、cīna (砂)、ʔaci (汗)

k'adzi (舵)、hidzi (肘)、mīdzi (水)、k'idzi (傷)、k'adzi (風) 龍郷町瀬留方言

『琉球訳』以外の文献資料のサ行とザ行の三者の区別がどうなっているのか、三者がどのように統合されてきたかが知りたいところである。そもそも、何故首里士族層の方言と『琉球訳』の対象の方言とは異なるのか、首里士族層の方言はどのように形成されてきたのかが明らかにされなければならない。そして、首里士族層方言のサ行とザ行の三者の区別の仕方は、首里士族層の方言の由来を考えるための材料となるかもしれない。

7. おわりに

服部1978は、現代琉球語の研究を土台にしながら漢語資料やハングル資料の検討を行った琉球語音韻史研究の最重要文献である。服部1978が扱った文献資料もテーマも多くが石崎2015と重なっている。石崎2015の見いだした知見もある。石崎2015の主張のいくつかが既に述べられている一方で、いくつかの重要な結論が服部1978と異なっている。しかし、石崎2015は服部1978との異同に言及していない。

恐竜研究に代表される古生物学は、何百万年も前の地層から発掘された骨と歯から骨格を復元するだけでなく、筋肉やその他の器官を復元し、食生活や運動能力、認知能力等の様々な側面をリアルに復元する。そこにはいま地球上に生息する生物に関する生態学の詳細で膨大な成果が大きく貢献している。琉球語の音韻史の解明にも現代琉球語研究の知見が大きな役割を果たす。過去の事象を直接に示す資料は魅力的だが、様々な制約がある。現在は過去の所産である。現在には過去を探る手がかりが残されている。歴史言語学の両輪である文献研究と比較言語学のバランスの取れた発展が今こそ望まれている。

本稿は、JSPS基盤研究(A) 24242014および国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」の研究成果の一部である。

参考文献

- 安溪遊地2014 「「すら」「よき」「きみ」が使われる現場から」『沖縄文化』116号
- 石崎博志2015 『琉球語史研究』好文出版
- 石崎博志2012 「アグノエル語彙研究序説 附アグノエル論著目録」『日本東洋文化論集』19号
- 石崎博志・ウェイン・ローレンス2012 「アグノエルの記した久高方言」『琉球の方言』37号
- かりまたしげひさ2014 「連体形語尾からみた『おもろさうし』のオ段とウ段の仮名の使い分け」『沖縄文化』116号
- 菊千代・高橋俊三2005 『与論方言辞典』武蔵野書院
- 国立国語研究所編1963 『沖縄語辞典』大蔵省出版局
- 長田須磨・須山名保子編著1977 『奄美方言分類辞典（上巻）』笠間書院
- 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子1980 『奄美方言分類辞典（下巻）』笠間書院
- 高橋俊三1991 『おもろさうし』の国語学的研究』武蔵野書院
- 仲宗根政善1983 『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店
- 服部四郎1978～1979 「日本祖語について1」～「日本祖語について22」『月刊言語』
- 法政大学沖縄文化研究所1978 『琉球の方言－奄美喜界島志戸桶－』4号
- 琉球大学琉球方言研究クラブ1980 『琉球方言』15号